

“Isabella, or The Pot of Basil, a Story from Boccaccio” と
Salome に見る愛と狂気の世界
Love, Madness and Death in “Isabella” and *Salome*

毛利 雅子

MOURI Masako

Abstract: John Keats was inspired by a story from Boccaccio and wrote “Isabella” as an original work of his own. A story from the New Testament, *Salome*, also fascinated many artists and writers at the time and was impetus for numerous masterpieces including performing arts and paintings. Why were people so interested in these kinds of rather grotesque stories involving the severed heads of lovers? This paper addresses the attractiveness of “Isabella” and *Salome*, and also discusses the nature of love, madness and death that lurks within human beings, which are recurring themes in their engaging notes.

Keywords: Love (愛) Madness (狂気) Death (死) Music (音楽)

1. Boccaccio から “Isabella” へ

Keats はその短い生涯の間に、後世に残るものとして “The Eve of St. Agnes” など著名な作品を残している。それぞれに当時でも評価が高かったものが多いが、その中では現在も作品としての評価が分かれ、また当時は余り芳しい評判がなかった作品に “Isabella; or The Pot of Basil” がある。このストーリー自体は彼自身の創作ではなく、Boccaccio の『デカメロン』を題材としている。

“Isabella” の登場人物はきわめてシンプルである。Isabella は使用人の Lorenzo と愛し合うようになるが、彼女をもっと金持ちと結婚させたいと思う兄達の姦計により、Lorenzo はだまされて連れ出された上に殺害され、さらに埋められてしまう。そうとは知らない Isabella の元に Lorenzo が亡霊となって現れ、事の次第を明らかにする。それに従って行った Isabella は Lorenzo が埋められた現場に赴き首を切り取って持ち帰り、鉢の中でめぼう木を植えて大切に育てる。これを怪しんだ兄達はその鉢を盗み、その中に Lorenzo の首が

入っているのを発見し逃亡、Isabellaは失望の余り死んでしまうという物語である。

基本的な話の流れは『デカメロン』に沿っているが、異なっている点もいくつか挙げられる。代表的な点としては、

その話は英訳では2000字足らずであるが、Keatsが韻文化したものは、約3600字、つまり2倍弱の長さにふくらんでいる。それは後述のごとく、作者の意見挿入という脱線のためでもあるが。このように、物語の量において、ボッカチオの話とキーツの詩には違いがある。さらに、ボッカチオの話には季節がないのに、キーツの詩では春から冬に至る四季の移り変わりが、物語の内容の移行の類推的役目を果たしている。¹

と論ぜられている。ここに挙げられているように、春(第1 - 20連) 夏(第21 - 31連) 秋前半(第32 - 41連) 秋後半(第42 - 54連) 冬(第55 - 63連)と緩やかな季節の流れの中で、ロマンスと残酷さ、そして狂気が表現されていくのである。Boccaccioから比較すると約2倍の量となった詩を通して、Keatsが表現しているのは、愛情、物欲、殺害、亡霊、再生、死といった概念であり、様々な技法を通してこの感情を豊かに映し出している。

2. “Isabella”の音楽性

さて、Keatsの物語詩の大きな魅力は、いくつか音楽的な要素を含んでいることである。例えば、「その音楽が特色とするソナタ形式の、2つの主題による対照的構成が、キーツやコウルリッジの幾つかの詩の特徴と一致する点である。」²と伊木氏が論じているように、この“Isabella”でも、例えば生と死、愛と憎しみ、死と再生といった対照的なテーマが表現されている。また

キーツの全詩中、音楽的要素が最も豊富といえる『イザベラ』では、音楽的比喩の使用法に、それ以前の詩とは違った変化が起こる。(中略)『イザベラ』では、音楽はひたすら恋慕を表現するものになっているのである。³

とあるように、音楽と“Isabella”の関係は非常に深いものとなっている。例えば、

Her lute-string gave an echo of his name, (st. 2, I. 15)

彼女のリュートの弦は彼の名を訝にして奏で、

“O may I never see another night,

Lorenzo, if thy lips breathe not love’s tune.” – (st. 4. II. 29f)

ああ明日の夜など来なくてもよい、

ロレンゾウ、貴方の唇が愛の調べを囁かないのなら。

She, to her chamber gone, a ditty fair

Sang, of delicious love and honey’d dart; (st. 10, II 77f.)

彼女は部屋に戻り、綺麗な小唄を歌った、

おいしい恋とキューピッドの甘い矢の唄を。⁴

と「これだけ3例からも明らかなように、『イザベラ』では恋の情念が音楽と不可分の関係にある。」⁵と論ぜられるのは当然でもあろう。

それに加えて、

And as he to the court-yard pass’d along,

Each third step did he pause, and listen’d oft

If he could hear his lady’s matin-song,

Or the light whisper of her footstep soft;

And as he thus over his passion hung,

He heard a laugh full musical aloft;

When, looking up, he saw her features bright

Smile through an in-door lattice, all delight. (st. 25)⁶

のように、足音さえ音楽に例える部分もあり、音楽とこの物語詩との関係は大きなものであることが伺える。更には、

‘I am a shadow now, alas! alas!

Upon the skirts of human-nature dwelling

Alone: I chant alone the holy mass,

While little sounds of life are round me knelling,
 And glossy bees at noon do fieldward pass,
 And many a chapel bell the hour is telling,
 Paining me through: those sounds grow strange to me,
 And thou art distant in Humanity. (st. 39)⁷

と、「亡霊は一人聖歌を歌い、甲いの鐘がなり、チャペルの鐘が時を告げる。自然美に音楽のイメージを配して」⁸、まだまだ音楽的描写は続いていくのである。その他にも多くの音楽的描写があり、「主人公男女の恋愛はこの他にも、第 25 連の明け方の祈りの歌や、第 43 連の子守唄のような音楽的比喩となって表現されている。」⁹ ことも既に論じられており、この作品と音楽的表現の関係は非常に深いものであることは明らかである。これは、「キーツは絵画と音楽の双方に興味をもっていたが、前者への愛好が一般的なものだったのに対して、後者へのそれはキーツ自身が作曲さえやりえたかも知れない、という種類のものだった。」¹⁰ こと、更に「彼にはコウルリッジと同じく、死と音楽が連想関係になる傾向があり」¹¹、音楽との関連性を考慮せずに Keats の作品を鑑みるのは、大切な視点を失ってしまうともいえるだろう。

3 . “Isabella”の特異性

このように“Isabella”は音楽的に響くだけではなく、もう 1 点、非常に興味を惹かれる特徴的な部分として第 51 連が挙げられる。ここでは、

In anxious secrecy they took it home,
 And then the prize was all for Isabel:
 She calm'd its wild hair with a golden comb,
 And all around each eye's sepulchral cell
 Pointed each fringed lash; the smeared loam
 With tears, as chilly as a dripping well,
 She drench'd away: - and still she comb'd and kept
 Sighing all day - and still she kiss'd, and wept. (st. 51)¹²

と歌いあげ、

ここでキーツはあくまでイザベラの行動に同調し、正当化することによって、優しさと狂気を一体としているのである。彼女が切り開く首は生きている時と同じ優しさをたたえていると述べ、その切断した首を'prize'であると表現する程彼女と同一の心境になる。¹³

と分析されている。

が、普通の神経で考えれば、いくら愛しい男性のものとはいえ生首（仮に死んでいたとしても）が'prize'（ご褒美）などということは想像出来ない。どんなに愛していたとしても、生首が一見して美しいものであるか、また心地良いものであるかどうかと尋ねられれば、一般的には答えはノーであろう。

4. "Isabella"と *Salome*

しかし、ストーリー性で類似点が非常に多く感じられるものが実は他にもある。Oscar Wilde の戯曲や Richard Strauss のオペラによって、芸術作品として名が伝えられている *Salome* である。もともとの出典は聖書だが、正確にはサロメの名は聖書のどこにも書かれていない。

サロメについて簡略に記しておく、聖書に基づいた解釈によれば、サロメはガリラヤの太守ヘロデ・アンティパスの後妻ヘロデヤの娘である。『マルコによる福音書』によれば、王妃ヘロデヤはヘロデの異母兄ピリポの妻であったが、サロメを連れてヘロデと再婚した。その不義の婚姻をバプテスマのヨハネに非難されたため、娘をそそのかして父王の誕生日の祝宴での踊りの報酬としてその首をはねさせた。娘はこれを銀の盆に載せて母に捧げたということになっている。が、Wilde の *Salome* は全く異なった趣を見せている。つまり、

聖書では、母ヘロデヤの傀儡にすぎない少女サロメは、母に相談した上で舞の褒美としてヨハネの首を求める。ところが、ワイルドのサロメは、自分の意思で舞の褒美としてそれを求めるのである。つまり、自分の愛を退けたヨハネの首に何としてでも口づけしたいという一念から、その首を求める¹⁴

のである。Wildeのこの劇により、サロメは「キリスト教から遠く隔たった、異教主義の権化」¹⁵となった。そして

ヨカナンとサロメに代表される、キリスト教と異教主義、神への愛と人間への愛、という二つの対極的なイメージが、重ね合わされ、ひとつに統一されて、世にも不思議な一篇の作品に結晶したのが、このワイルドの劇¹⁶

なのである。また、これは「コウルリッジの説く対立するものを統一する働きとしての想像力を、明快に例証する作品だといってよい。」¹⁷という結論に導くことも出来る。

ここまで述べれば、“Isabella”とSalomeのストーリーの中に類似点・共通点があることが見てとれる。が、これだけでは単に似ているというだけでではなく、WildeとKeatsの関係は見えてこない。しかし実はWildeは、「自分の創作において一番大きな影響を受けた人として、キーツ、ペイター、フローベールの三人を挙げている」¹⁸のである。更にこの三人は、「ワイルドのデカダンス的耽美主義の先達となった、三人の耽美主義者であった」¹⁹ことはよく知られている。また、「美の欲求は死の意識によって強められると説くペイターの耽美主義は、死の観念と密接に結びつく」²⁰ため、「喜んで死顔に接吻する女のイメージに達するためには、我々はキーツの詩『イザベラ』(1819年)にまでさかのぼらなければならない」²¹とも論じられている。確かに、どのように愛する人が死に至ったか、またそれを求めた女が間接的に死に至ったのかもしくは殺されたのかなど異なっている点が多いが、恋しい人の首を求め、それに接吻をする、いとおしむという行為に基本的に変わりはない。

ここまでくると、“Isabella”とSalomeが単に似通ったストーリーというだけでなく、その奥には深く繋がったものがあることがわかる。またこうして改めて見ると、Keats自身が作品に対して否定的で“Isabella”の出版を躊躇ったにも関わらず、何故これほど大きな詩作となったのかが垣間見えるのではないだろうか。

5. Keatsの愛と死生観

この時期、Keatsに何があったのかを見てみると、「まず第一に、弟Tomの死であり、次にFannyとの恋であった」²²こと、更には「彼の恋は殆どぬきさしならぬ状態にまで進展していた」²³ことがわかる。自身が結核という死の恐怖と闘いながらも、愛を育て

いた Keats にとっては、「Boccaccio 語るところの Isabella の物語に〈愛〉（人間の情熱のドラマ）と〈ヴィジョン〉（想像力のドラマ）というお気に入りのテーマ」²⁴を発見し、またそれにより「Isabella の物語は〈愛〉と〈死〉と〈ヴィジョン・想像力・夢〉という三つの中心テーマ」²⁵であることが彼の心を捉えたことは想像に難くない。実際、「Isabella」で Keats は、

With duller steel than the Persean sword
 They cut away no formless monster's head,
 But one, whose gentleness did well accord
 With death, as life. The ancient harps have said,
 Love never dies, but lives, immortal Lord:
 If love impersonate was ever dead,
 Pale Isabella kiss'd it, and low moan'd.
 'Twas love; cold, - dead indeed, but not dethroned. (st. 50)²⁶

つまり愛は決して死なないと唱え、死に勝る愛を訴えているのである。しかしその一方で、

Fanny との愛に生きる詩人にとって、「愛は死なず」と信じ続けることが出来たならば、どんなにか幸福だったであろう。しかし、彼にはそれが出来なかった。詩人の理性の目には、〈死〉が人生の価値を総て破壊し去る者と見える時があったからだ²⁷

と論ぜられている。またこの頃の辛い体験から、「キーツにあっては、時には死は美以上のものすらであった」²⁸ことを鑑みると、Keats にとって愛と死とは不可分だったのかもしれない。それがもし念頭にあったとすれば、一見グロテスクに見える“Isabella”にも、死してなお愛を永続させたいという願望が込められていたのかもしれないし、これは *Salome* にも共通することであろう。

6 . *Salome* に魅了された芸術家

さて翻って、その *Salome* を見てみると、前出の Wilde だけでなく、Massenet（オペラ『エロディアード』）や Schmidt（バレエ曲『サロメの悲劇』）らも *Salome* に惹かれた

芸術家であるが、よく知られているところとしては Klimt が挙げられる。彼の作品の中で生首を持った女性として描かれているのが、旧約聖書外典の1つである『ユディト記』に登場するユダヤ人女性のユディトである。が、実際には『ユディトII(サロメ)』があり、Klimt はユディトと言いながらサロメを描いている。つまり「シュトラウスの歌劇のクライマックスのサロメ - ヨカナーンの首を得て恍惚となるサロメ - を描く絵である」²⁹ ことがわかる。更にこの「サロメの絵では、サロメも朝顔の花とつるに囲まれているが、手に持つ切られたヨカナーンの首に寄せるサロメの愛は、満たされることのない不毛の愛である。」³⁰ ことが伺われ、「ヨカナーンの首を持って興奮に体をこわばらせたサロメのイメージは、何とよくシュトラウスのクライマックスの音楽を表していることだろう。」³¹ と評されるものなのである。

また、Yeats には「ワイルドのイメージに頼りながら」³² も「日本の能を手本にしてワイルドの『サロメ』を書き直した」³³ 作品がある。Yeats は「同じアイルランド人で九つ年上のワイルドと若い頃から親しかった」³⁴ こともあり、「彼の書いたものをしばしば好意的に批評」³⁵ したが、Wilde の *Salome* に関しては批判的だった。とはいえ、題材そのものには興味を持ったようで、『大時計塔王』という作品を完成させている。そしてそれは、

イエイツの劇『大時計塔王』は、文字通り面をつけたサロメという能風のサロメ劇であるばかりでなく、比喩的にただ能風という仮面をつけたにすぎないワイルドの『サロメ』だともいえなくはない³⁶

作品だったのである。

7. 死に昇華された愛

殺されたにせよ、自分が望んで男に死を与えたにせよ、死んでしまった愛する男の首をいとおしむ、そう聞けば単にグロテスクな怪奇趣味の話でしかありえない。恋に狂った女の狂気と捉えられても当然かもしれない。しかし、本当に単なるグロテスクな話であれば、Boccaccio から始まり、Keats、Wilde、Yeats、Strauss、Massenet、Schmidt、Klimt とこれだけ多くの芸術家がこのテーマに心を奪われるであろうか。いや、そんなはずはない。彼らが心惹かれた理由は、ここに愛と死というテーマが隠されているからなのではないか。また、死してなお愛は永続するという人間の望みが託されているのではないだろうか。愛

する人が自分だけのものになり、また愛されし者は独占される恍惚を味わう　これは人間の根底にある、そして本能にも通じる願望なのかもしれない。

批評家の評判は余り芳しくなく、また現代でも評価の分かれることの多い“Isabella”だが、この作品の本質はかなり奥深い。愛と死が共生する瞬間、そしてグロテスクさがかえって恋を濃密にするという一面を、まるで音楽の調べのように表現する　これが“Isabella”の魅力でもあろう。

註：

-
- 1 伊木和子『キーツの世界』 研究社 1993. p.35
 - 2 同上 p.124
 - 3 同上 p.131
 - 4 同上 pp.131-132
 - 5 同上 p.132
 - 6 Keats, John., (edited with an Introduction and Noted by Elizabeth Cook)
Selected Poetry, Oxford University Press, 1996. p.97
 - 7 ditto, p.101
 - 8 岡田章子『キーツの詩』 あぼろん社 1986. p.151
 - 9 伊木和子『キーツの世界』 研究社 1993. p.133
 - 10 同上 p.139
 - 11 同上 p.144
 - 12 Keats, John., (edited with an Introduction and Noted by Elizabeth Cook)
Selected Poetry, Oxford University Press, 1996. p.104
 - 13 岡田章子『キーツの詩』 あぼろん社 1986. p.153
 - 14 山川鴻三『サロメ - 永遠の妖女 - 』 新潮社新潮選書 1989. p.14
 - 15 同上 pp.111-112
 - 16 同上 p.112
 - 17 同上 p.112
 - 18 同上 p.117
 - 19 同上 p.117
 - 20 同上 p.118

-
- 2¹ 同上 p.119
- 2² 山内正一『キーツ研究 - 物語詩を中心に - 』大阪教育図書 1986. p.75
- 2³ 同上 p.75
- 2⁴ 同上 p.81
- 2⁵ 同上 p.81
- 2⁶ Keats, John., (edited with an Introduction and Noted by Elizabeth Cook)
Selected Poetry, Oxford University Press, 1996. p.103
- 2⁷ 同上 p.111
- 2⁸ 阪田勝三『ジョン・キーツ論考』南雲堂 1976. p.246
- 2⁹ 山川鴻三『サロメ - 永遠の妖女 - 』新潮社新潮選書 1989. pp.136-137
- 3⁰ 同上 p.137
- 3¹ 同上 p.137
- 3² 同上 p.191
- 3³ 同上 p.191
- 3⁴ 同上 p.189
- 3⁵ 同上 p.190
- 3⁶ 同上 p.200

参考文献

- 伊木和子『キーツの世界』研究社 1993.
- 英米文化学会編『英文学と結婚 - シェイクスピアからシリトーまで - 』彩流社 2004.
- 岡田章子『キーツの詩』あぼろん社 1986.
- 阪田勝三『ジョン・キーツ論考』南雲堂 1976.
- 志子田光雄『英詩理解の基礎知識』金星堂 1980.
- 水之江有一『キーツとロマン派の伝統 - 美の象形文学とその幻想性 - 』北星堂書店 1979.
- 山内正一『キーツ研究 - 物語詩を中心に - 』大阪教育図書 1986.
- 山川鴻三『サロメ - 永遠の妖女 - 』新潮社新潮選書 1989.
- Keats, John., (edited with an Introduction and Noted by Elizabeth Cook)
Selected Poetry, Oxford University Press, 1996.
- Munakata, Kuniyoshi., *Keats' Love Letters*, The Hokuseido Press, 1971.